(164) 栃木県関白町の今里鉱山 参考文献(1)を手引きに本鉱山の探査に出かけた。文献によれば、現地は既報の「(101) 関白鉱山(別称羽黒鉱山)」の東方で100mの所に位置しているとのこと。小山からは余り遠くはない。 また文献には、重要な手引き資料となる「羽黒鉱山付近鉱床位置図」が掲載されていた。この図は以 降に、図3として複写掲載している。この鉱山図には何故か「寛益坑」が2カ所、そして、その北方に「四号坑」が記載されている。数回にわたる探査で、「寛益坑」の1つと、「四号坑」は確認でき

た。が、もう一つの「寛益坑」は少し?である。
文献によれば、この鉱山は金銀鉱山であり、鉱脈は流紋岩中の含金銀石英脈なそう。鉱山跡は確認

できた。そして一帯で、石英転石を表面観察で探したが、全く見つけていない。時の経過とともに、埋むれてしまっているのかも知れない。いや未だ著者の「岩力」が無いのが第一か。本鉱山跡に関しての特記事項である。著者は栃木の多くの鉱山跡を訪問している。現地に看板などで鉱山跡を明記している場所としては、観光地化されて良く知られている足尾鉱山跡以外に、見たこれがなかった。 とがなかった。が、この「今里鉱山」跡で紹介看板を見つけた、これには驚いた。写真7,写真8を 参照。

探査日2020年1月、2月



図1 東北道の栃木県内の上河内SAより、現地近傍のA点までは車で約10分。GPSのガーミンによる経路ログを青色曲線で示している。図中の3つの小さい方の赤丸が「今里鉱山跡」である。 大きい方の赤丸は「関白鉱山(別称 羽黒鉱山)」跡であるが、現在はカオリン採石場となって、稼 業中である。159号線のA点が鉱山跡への林道入口である。入口直ぐにチェーンが張られており、 車での進入不可。林道入口付近には車1台は駐車できそう。万が一チェーンが外れていても、林道の 先には倒木が多く、バイクでも通行は出来ない。車が複数台の時には、159号をA点より更に30 0m先の工場手前の右側にある林道を入ってのP点近傍が宜しいかも。この経路ログからは、著者が P点に駐車したことが分かろう。

「四号坑」へは、F点の所に駐車し、そこから $G\rightarrow H$ と進み、その後 $I\rightarrow D\rightarrow B\rightarrow A\rightarrow F$ と歩いて 一周することとなった。

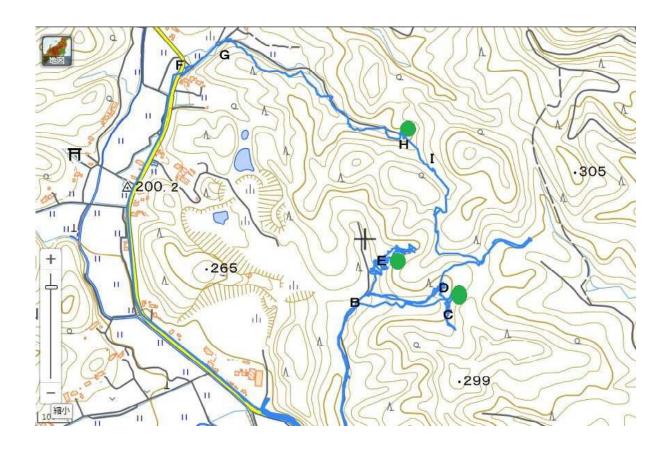


図2 図1の部分拡大図。林道入口のA点から10分~15分でB点。B点で、進んできた林道の右手にある東方向を向いている分岐林道に入っていく。広くなだらかな沢である。林道を進んでくると、D点付近に数本の「門柱」があった。写真4参照。C点にある広いプラトーへの入口である。このプラトーは人工的に平地化されたと思われる。図3からそれが見て取れる。鉱山施設跡か。プラトーは結構広いが、一面、背丈ほどのクマザサが生い茂っており、通り抜けるのには四苦八苦しよう。数人ならば、交互に鎌で切り開けば楽であろう。このプラトーをじっくり探査すれば、見つかるかもしれない。黄緑丸が坑口跡。入口は完全に埋まっているが、周りの形状は坑口であることを教えてくれている。図3と対照して「寛益坑」跡と断定した。B点より少し上流のE点付近も広いプラトー。ここは歩きやすい。近くの山際に、「金山跡」を明記している案内看板が立っていた。E点の先に坑口跡らしき崩れ場所があった。崩れ方が激しいので確定しがたいのではあるが。黄緑円でマーキングしている場所である。

「四号坑」の探査では、F点に車を駐車(十分な空き地があったので)し、そこから歩いた。地形図中には $G \rightarrow H$ と林道が描かれているが、現状はG点から直ぐに林道はほぼ消えてしまっている。なをかつ灌木などが生い茂って、徒歩でも進行困難であった。灌木が少ない森林の中を遡上していった。時折、林道らしい箇所も散在していたが、倒木も多く、完全に林道は死んだようである。が、H点付近は結構開けていた。そしてその付近で、黄緑色で示して居るように「四号坑」と断定できる坑口跡を確認した。H点から上流のI点付近には、何故かコンクリート敷きの林道が数十mの長さで残っていた。何故ここに、コンクリートを打ったのであろうか? 疑問である。その後、山中の不確かな林道に欺されながら、ガーミンを手引きにID点にたどり着き、IB点を経由して下山した。IF点まで幹線道路を徒歩で戻った。

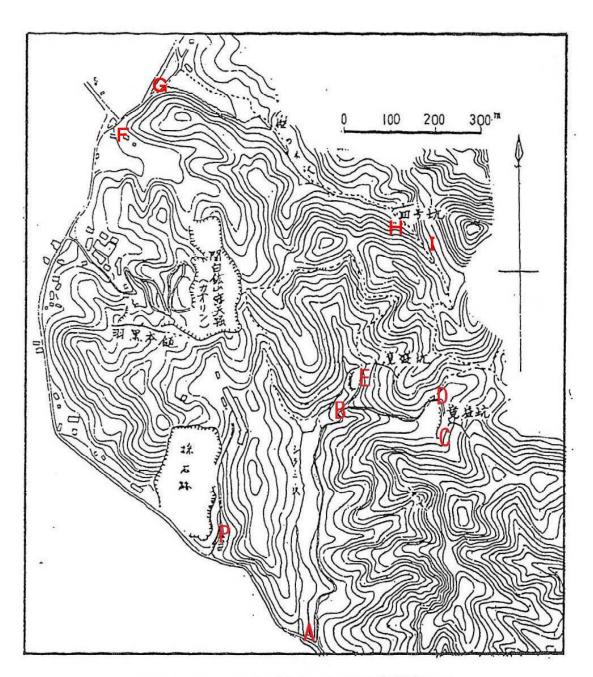


図23-1 羽黒鉱山付近鉱床位置図

図3 参考文献(1)から複写掲載。図1、図2に記したチェック点と対応できた箇所に同じ文字を記している。左側の「羽黒本ヒ」は現地が、金銀鉱山として稼業していたときの名残りである。現在は、現地はカオリン採掘地として現業している。「シラニ沢」の上流には、何故か同名の「寛益坑」が2カ所に記されている? 坑口と坑道の延伸線分が描かれている。 C, D 近傍の「寛益坑」は確認できた。が、E 近傍の「寛益坑」は付近の山斜面の崩落が多く、断定しかねている。 この図をよく見ると、右上半分のところに「四号坑」と名称のある坑口記号と、坑道記号が書かれているのに気がついた。現地を数週間後に再訪し、H 点で「四号坑」を確認した。

鉱山跡写真



写真1 上河内SAを降りて、159号を 北西方向に進んできた。図1のA点である。 10mほど前方の右手にある、廃れた林道 の先に現地がある。



写真2 林道入口。直ぐにチェーンが張られている。この付近には車1台は止められそうである。林道は補修や手入れがされて居らず廃れているが、幅が広く平坦である。が、林道を遮断するように倒れている倒木が少なくない。歩き抜けるには問題はない。



写真3 林道を進んできた。B点である。 前方右側に分岐林道がある。C, Dには この分岐林道に入っていく。前方はE点 方向である。



写真4 図2のD点である。正面に2 本マルタの「門柱」が立っている。赤丸を付けている。この門柱の右手前方 は広いプラトー。が全面に背丈ほどの 熊笹が生い茂っている。



写真5 プラトー部には木々は無く、一面笹が生い茂っており、先に進むのに難儀する。なを、このプラトー部の外周は林であり、下草がなく歩きやすいので、周りの林の中を迂回するのも方法である。



写真6 図2中の黄緑丸の箇所である. 笹などの灌木で見通しが悪いが、中央の 黒い箇所に潰れた坑口。図3の「寛益坑」 坑口跡と断定した。近傍の立木に赤テー プを巻き付けている。



写真7 図3中のE点付近の「寛益坑」 当たり。坑口前の段丘らしいのがある が、崩落が広くて坑口跡?である場所。



写真8 現地、E点付近の山際で、「金山跡」と銘打ったこの看板を見つけたときには驚いた。文面の詳細は写真9。



写真9 上河内教育委員会が設置した「金山跡案内板である。この看板を見たとくの看板を見たとくの大大である。著者は栃木県内である。著者は栃木県内地で高地ので見かけた。現地では大大でで見かけた。とに、設定をである。がでは、ないなかった。といるでは、では、これでの他の鉱山のも良いかも、、栃木の他の鉱ので。他一のものなので。



写真10 150号を進んできた。F 点付近。幹線は緩く左折しているが、 前方右側に枝道が延びている。この分 岐付近に広い遊休地がある.ここに駐 車した。





写真12 H点付近で、坑口跡を見つけた。この写真の中央部分である。草木が生い茂った時期には見つけには、かも知れない。この写真の左側には、大きな地滑り跡が生々しく残っている。右側の先には、何故かコンクリート敷きの林道が残っていた。 I 点付近である。



写真13 写真12で示した坑口跡の 入口から内部を覗く。入口部分には上 部からの土砂の落下で大分埋まってい るが、奥は綺麗に生き残っていそうで ある。

付記

(1)「四号坑」は、 $F \rightarrow G \rightarrow H \rightarrow I \rightarrow D \rightarrow B$ ・・・の経路で探査した。 $G \rightarrow H$ の経路は林道はほぼ

消滅しており、踏破には結構根気が必要である、特に一人では。 「四号坑」の訪問は、E点かD点からH点を目指した方が良さそうである。このコースは林の中な ので下草、灌木が少ないので、歩きやすい。しかし、その場合には本探査報告書とGPSを持参する ことが条件である。

(2) D, C, E, H点でじっくりとズリなどの観察を行っていない。本探査報告書を参考指針とす れば、現地が確定しているので、時間予定も立てられ、現地でじっくりと時間をかけて観察すること が出来よう。

参考文献 (1)「日本金山誌 第4編 関東・中部」、社団法人 資源・素材学会、1994年。